



## 地域と大学をつなぐ子どもたちのアート

現在、豊橋創造大学短期大学部で保育士を目指す学生に造形科目を教えています。2年という短い期間の中で、学生たちにとってどういった場を提供することが学びを深めるのか、自分自身の経験を振り返ると、学外での活動を体験させたいという思いが強くなりました。11月に新城市の廃校で開催されるクラフトマーケットにて、2015年より児童画の展示とワークショップをさせていただけることになり、例年ゼミ生には春から準備に取り掛かってもらう流れができています。まずはその年のテーマを決め、夏休みに新城市の年長児、小学1年生の子を対象とした児童画制作のワークショップを行うため、3つのグループに企画させます。その他にもテーマに沿った児童画を各所からお借りし、約300作品を集め、「このは美術館」と題して展示をします。2日間開催されるそのクラフトマーケットでは、来場した家族がワークショップに参加し、学生たちは親が見ている前で子どもにやり方を教えます。また、運営スタッフの方と駐車場の係も行い、普段関わることのない大人たちとの交流の場面が随所に見られることとなりました。学校とは全く違う環境から、学生たちは実践的な対応を求められ、それに応えようと頑張ることができていました。

コロナ禍において昨年度は予定していたワークショップの実施や、このは美術館の開催ができませんでしたが、形を変えながら子どもたちのアートを介した地域との連携は継続することができています。学生にとっての学びの場をこれからも考えていきます。



写真1 2016年このは美術館風景／葉っぱの形に切り紙をし、ラミネートをしたらマジックで色を塗って完成。窓に貼ると、いろいろな光と影が会場を彩った。 写真2 2019年このは美術館風景／協同制作の活動を取り入れた児童画を展示した。また、会場はこれまでの校舎ではなく、近くの民宿の敷地にある合掌造りの建物。 写真3 2019年このは美術館風景／好評だった2016年のスタンドアートのワークショップを、ペンダントにした。





写真4 豊橋市内こども園にて／菜の花畑を描いていく。水色と黄色はウクライナの国旗の色でもある。 写真5 福島県立博物館での展示と制作／会津に非難をしている大熊町の子どもや、ワークショップに参加した子どもによって描いてもらった。写真6 ジトーミル青少年芸術センターにて／日本から送った児童画は幼稚園や小学校に分けて展示された。 写真7 第12小学校にて／ウクライナでは1枚の紙に大勢で描く事はあまりしないらしい。 写真8 ウクライナから届いたクリスマスカード／ウクライナには切り紙の文化があり、それを貼ってくれた作品も多い。

原発事故によって被災した地域を活かすための事業として進められている「菜の花プロジェクト」は、放射性物質が移行していない食用油や、ディーゼル油、メタンガスを作り出す活動であると知りました。そして、2017年に「ちいさな黄色い手紙プロジェクト」と題して、豊橋、会津(福島)、ジトーミル(ウクライナ)にて、菜の花を描いた児童画の展示巡回と、絵巻物をつなぐワークショップを行ったのです。

豊橋市(渥美半島一帯)の春は、あちこちに菜の花のある風景が見られ、子どもたちにとっても親しみのある花の一つです。菜の花の活用として「菜の花プロジェクト」を広く知ってもらうとともに、菜の花がつなぐ子どもたちの表現活動によって、遠く離れた友達への思いを形にしたのが、「ちいさな黄色い手紙プロジェクト」でした。学生にはこども園での児童画の制作や、クリスマスカードの制作に関わってもらい、この年から12月にはウクライナの子どもたちとクリスマスカードの交換を続けています。学生には常に外に意識を向けてもらい、広い視野で考えられるようにと願っています。